

インテレクチュアル・ヒストリーの新しい時代——解題にかえて

ヒロ・ヒライ

本書は Anthony Grafton, *Defenders of the Text: The Traditions of Scholarship in an Age of Science, 1450-1800* (Cambridge MA: Harvard University Press, 1991) の全訳だ。副題をそのまま訳せば「科学の時代における学問の諸伝統 (1450-1800)」だろう。しかし科学という言葉で現代科学と混同する読者がいるかも知れないという考慮から、射程のひろい「近代ヨーロッパにおける人文学の誕生」とした。

著者アンソニー・グラフトンはアメリカのプリンストン大学の歴史学教授で、現在のところ世界でもっとも成功し、もっとも忙しいルネサンス学者の一人だ。彼の数ある著作のうち、本邦でもすでに『カルダーノのコスモス・ルネサンスの占星術師』(勁草書房、二〇〇七年)と『アルベルティ・イタリア・ルネサンスの構築者』(白水社、二〇一二年)が紹介されている。しかし本書第四章の主人公スカリゲルをあつかった博士論文と、そこから出版された著作『ヨセフス・スカリゲル…古典学史の研究』(一九八三年)に並行するように、一九七〇年代なかばから書きためた論考群を

(1) *Cardano's Cosmos: The Worlds and Works of a Renaissance Astrologer* (Cambridge MA: Harvard University Press, 1999); *Leon Battista Alberti: Master Builder of the Italian Renaissance* (Cambridge MA: Harvard University Press, 2000) を参照。

まとめた本書は、間違いなくグラフトンの主著だといえる。⁽²⁾ 驚くほど博識でユーモアにとみ、悩ましいまでに複雑な本書を一言で表現するのは難しい。

誤解を招かないように最初に断っておきたいのは、本書が哲学史や思想史を従来のように記述しようとする書物ではないことだ。たしかに本書にも多数の哲学者たちの名前や学説が登場する。とりわけ古代末期に成立した偽書『ヘルメス文書』の「最期」を議論する第五章や第六章では、その傾向が顕著だ。しかし、およそ哲学者とみなすことはできない文筆家や歴史家、宗教家たちの方がはるかに多く登場する。内容をしっかりと見渡せば、ルネサンス期イタリアで隆盛をきわめた人文主義、そこで盛んに議論された古代ギリシア・ローマの古典の再生と受容、それらの読解、さらに旧約聖書の記述と各国史を結びつけて天地創造から世界の終末までの記述を試みる普遍史や年代学、真正作と偽作の問題、聖書やホメロスの叙事詩のテクストの歴史など、つねに考察の俎上にあがっているのはテクストとその解釈の歴史だ。こうした問題をめぐる知識人たちの知的な営みの諸伝統を、イタリア・ルネサンスの人文主義者たちから説きおこして、現代の人文諸学や大学教育の基礎を与えたと考えられている一九世紀ドイツの歴史主義や教養主義にまであとづけるのが、本書のおもな目的となっている。

さまざまな知の領域にまたがる多様な問題をあつかう本書は、学問の一分野の通史を記述する伝統的な学問の成立史でもない。本書のなかで何度も言及されるレイノルズとウィルソンの『古典の継承者たち』ギリシア語・ラテン語テクストの伝承にみる文化史⁽³⁾（国文社、一九九六年）とは好対照をなしているだろう。本書が提起するのは、幅広い「テクストの科学」の歴史であり、テクストへの対峙を基礎におく人文学のすべての領域にとつて重要なものだ。

より専門的に表現すれば、『テクストの擁護者たち』はインテレクチュアル・ヒストリー・intellectual history と呼ばれる「知の営みの歴史」をあつかった書物だ。本邦ではなじみの薄い「インテレクチュアル・ヒストリー」という

用語は、これまで精神史や知性史とも訳され、ときに思想史や観念史、心性史といった近隣分野と並列されてきた。これらの諸分野は、それぞれが重なりあう部分もあるので明確な線引きをするのは困難だ。むしろ既存の学問の壁をこえて、分野横断的かつ多角的に問題の分析をおこなうのが、この手法の特徴でもある。

インテレクチュアル・ヒストリーという歴史学の一分野は、長い伝統をもっている。しかし一九九〇年代以降にみられる驚くべき急展開は、それまでのものとは一線を画している。まさにこの転機となったのが、『テキストの擁護者たち』の出現なのだ。つまり本書は、この領域に新しい時代を切り開いたといっても過言ではない。本書とそれにつづく一連の作品によってグラフトンが九〇年代以降の歴史学に与えた影響は、ルネサンス学を震源として中世史や近代史の研究者たちを巻きこみ、科学史や医学史、書物・印刷史、文学・芸術史をはじめとする多様な分野に波及していった。そしてこの四半世紀にわたる研究・執筆・教育活動をとおして、グラフトンは欧米における歴史学の一大権威となった。

残念ながら、この歴史学における大変革は一部だけしか本邦には伝わっていない。しかしすくなくともP・フィン・ドレンの一九九四年の主著『自然の占有…ミュージアム、蒐集、そして初期近代イタリアの科学文化』（ありな書房、二〇〇五年）が紹介されていることは、特筆に値する。A・ブレアのデビュー作『自然の劇場…ジャン・ボダンとルネサンス科学』（一九九七年）は、より直接的な影響をグラフトンの仕事からうけた作品だ。³⁾同様に、グラフトンの影響下に成立したK・パークとL・ダストンによる野心作『驚異と自然の秩序（1150-1750）』（一九九八年）は、多大な

(2) Anthony Grafton, *Joseph Scaliger: A Study in the History of Classical Scholarship. I: Textual Criticism and Exegesis* (Oxford: Clarendon, 1983).

インパクトを世界の歴史家たちに与えた⁽⁴⁾。こうした研究者たちが一堂に会した『自然の細目…ルネサンス期ヨーロッパの自然と諸学』(二〇〇〇年)は、まさに記念碑的な論集だ⁽⁵⁾。さらにそのスピリットは、論集『ヒストリア…初期近代ヨーロッパにおける経験主義と博識』(二〇〇五年)に受けつがれている⁽⁶⁾。またN・シライシの入魂作『歴史、医学、そしてルネサンスにおける諸学の伝統』(二〇〇七年)も、グラフトンの影響を抜きにして語ることはできない⁽⁷⁾。こうした歴史学に大変革をもたらした潮流の源が、まさに『テクストの擁護者たち』なのである。

さて、本書のなかでグラフトン自身は、インテレクチュアル・ヒストリーがなんであるのか明確な定義をしていない。なかなか手短かに説明するのが難しい領域であるし、現在でもこの分野で活躍する研究者たちのあいだで意見の一致があるわけではない。むしろこの多様性は、将来にわたって研究の多彩さと豊かさを生む原動力だとさえ考えられる。

ひとつ明確にいえるのは、グラフトンが知の営みの歴史を非合理から合理性へとむかう単線的な発展とは考えていないことだ。本書では、現代的な価値観から知の山脈を形成すると目される山頂群、つまり「巨人たち」を点と点で結んでいくような記述はされず、そうした巨人たちの陰に隠れていた、しかし歴史上では重要な働きをしたポリツイアーノやアンニウス、スカリゲルやカゾボンといった人物たちに光があてられる。

グラフトン自身の言葉を借りれば、「これらを結びつける究極的なものは、思いがけないこと、逆説的なことにたいする関心だ」(序章)。「必要となるのは、ひとつの科学や学問の体系がたちを変えてしまう前の姿を再構成することだ。[…] いままで奇妙にみえる問いに与えられた的外れな解答の意味を理解しなくてはならない」(第四章)。

「分析対象となる著作を、先行する時代あるいは同時代の多くのテクストと体系的に比較してこそ、現代の読者は過去の著者がもちいた専門的な概念や問題に精通できる。そうしなければ、斬新なもの[…]と伝統的なものを区別で

きない。また、当の著作が同時代や後世の学者たちにどのような反応をおこしたか、それを注意ぶかく観察することによってのみ、現代の読者は「過去の問題がもっていた」本来の目的を発見できる。そうした要因のそれぞれにしかるべき注意をばらう研究のみが、「…」正当といえる歴史的な評価を与えられる」(序章)のだ。

こうした独特な手法から、なにが見出されるのだろうか。本書を構成する各章をケース・スタディとして、グラフトンは「テクストの科学」に内在する時代や文化の違いをこえた普遍的な問題を提起している。それは読解という作業における典型的なふたつの態度の相克だ。それらの態度の一方は、時空を超越した生きた鑑かがみとして過去のテクストを読み手の関心やニーズに引きつけて解釈し、そこから教訓さえも導出しようとする。この態度の極北には、古代ローマの詩人オウィディウスによる『変身物語』が中世ヨーロッパではキリスト教的な教訓譚として読まれた例があげられる。もうひとつの態度は、いかなるテクストも歴史の産物にとらえ、それが成立した背景・文脈に置きなおし、

- (3) Ann Blair, *The Theater of Nature: Jean Bodin and Renaissance Science* (Princeton: Princeton University Press, 1997). 最新作『知心には多きもの：近代以前の学知の管理』Too Much To Know: Managing Scholarly Information before the Modern Age (New Haven: Yale University Press, 2011) の邦訳が準備中である。
- (4) Lorraine Daston & Katharine Park, *Wonders and the Order of Nature, 1150-1750* (New York: Zone Books, 1998).
- (5) Anthony Grafton & Nancy G. Siraisi (eds.), *Natural Particulars: Nature and the Disciplines in Renaissance Europe* (Cambridge MA: MIT Press, 2000).
- (6) Gianna Pomata & Nancy G. Siraisi (eds.), *Historia: Empiricism and Erudition in Early Modern Europe* (Cambridge MA: MIT Press, 2005).
- (7) Nancy G. Siraisi, *History, Medicine, and the Traditions of Renaissance Learning* (Ann Arbor: University of Michigan Press, 2007).

受容される過程で生じた論争や誤読さえも考慮に入れて読解しようとする。後者の態度の成長とともに、西洋における人文諸学の基礎となった歴史主義が築かれていった。こうしたテキストにたいする批判的な歴史感覚の展開をあとづけるうえでカギとなるのが、本書で考察されるアンニウスやスカリゲル、カゾボンといった人々なのだ。

一方、グラフトンの手法をもちいて本書を分析してみれば、一見して独創的にみえる彼の作品にも、それぞれの章にヒントを与えた著作が存在することに読者は気がつくだろう。紙幅の関係ですべてを指摘するわけにはいかないが、第三章と第四章はA・クレンプトの『世界史記述の世俗化』（一九六〇年）、第五章と第六章はF・イエイツの『ジョルダーノ・ブルーノとヘルメス主義の伝統』（一九六四年）、第七章ではR・エヴァンズの『ルドルフ二世とその世界』（一九七三年）、第八章はR・ポプキンの『ラ・ペイレール』（一九八七年）といった具合だ。⁽⁸⁾しかしこうした書物の陰でより大きな影響を与えているのは、彼がロンドンで師事したA・モミリアーノの仕事だ。今後この人物の歴史方法論との比較がなされれば、本書をさらによく理解できるだろう。⁽⁹⁾

『テキストの擁護者たち』の邦訳を所収する *bibliotheca hermetica* 叢書は、インテレクチュアル・ヒストリーをあつかう国内外の良書を読者にひろく紹介することを狙いとしている。その企画・運営および執筆や講演をとおして、私自身もこの手法を説明することを試みてきた。⁽¹⁰⁾ そうしたなかで本書はつねに規範であり、よき手本となっている。

しかし正直なところ私自身、本書の真価を理解するには時間がかかった。最初の出会いは、一九九四年に渡欧して間もなく博士論文のための研究で駆け足に読破したときだった。目先の研究テーマに縛られていた私の理解は、十分なものではなかったと思う。その十五年後に翻訳計画がスタートしてから、再度じっくりと読みこむことになった。

本書の端から端まで、さらに注記の隅々まで何度も読みかえすなかで本当に多くのことを学び、多くのことに目が開かれた。そして本書は、私にとって真の意味での宝物となった。

最初に『テキストの擁護者たち』の邦訳を提案することで、こうした素晴らしい発見の機会を与えてくれたアダム・タカハシ君、そして私の集中講義での議論に参加してくれた学生諸君に心から感謝したい。邦訳を仕上げるまでには、ほかに多くの仲間たちの手助けがあった。大阪大学の加藤浩・桑木野幸司、慶応義塾大学の赤江雄一、立教大学の小澤実、東京基督教大学の加藤喜之、ナイメーヘン大学の坂本邦暢の各氏には、訳文の確認および専門用語やギリシア語・ラテン語の問題など、いろいろとお世話になった。超有名ブログ『石版!』の紺野正武さんには、訳出の終わった全原稿をおして表記の不統一などの指摘をお願いした。勁草書房の関戸詳子さんには、素晴らしい書物としてプロダクトが読者に届くよう最善の配慮をいただいた。毎度のことながらも美しい装丁は、岡澤理奈さんによるデザインだ。しかしもともと称賛に値するのは、忙しい教育者としての本業のかたわらで、五年の歳月をかけて根気よく下地となる訳稿をつくりあげた福西亮輔さんの不断の努力と訳者としての類まれな才能だ。なにか特別な訓練は受けていないというが、博識かつ多言語にわたる難解な原著をとて巧みに翻訳していただいた。シリーズ内での統一性を重視するために、彼の古風で味のある文体を修正したことで不具合が生じたのであれば、それはひとえに私の責任だ。

(8) ブリル書店の有名な「インテレクチュアル・ヒストリー叢書」*Studies in Intellectual History* は、R・ポプキンを編集主幹として、この「ラ・ペイレル」からスタートした。ポプキン一派とグラフトンの関係も探求されるべき課題だ。

(9) *bibliotheca hermetica* 叢書では、A・クレンプトとA・モミリアーノの主要作も紹介する予定だ。

(10) 二〇一四年七月に東京大学の科哲講座の一環として開催した集中講義と公開講演「科学革命の史的コンテクスト…インテレクチュアル・ヒストリーの方法と実践」をあげておく。『知のミクロコスモス』（中央公論新社、二〇一四年）の序文と「インテレクチュアル・ヒストリーとはなんですか?」[JUP]（二〇一四年二月）、七一〇頁も参照。

悩ましいほどに高度で複雑なシンフォニーのような内容であるからこそ、文体や表現はできるだけ平易になるように心がけた。訳文の確認には細心の注意を傾けたが、著者特有のユーモアにあふれた言葉遊びや隠されたトリックを見抜けずに訳し損なっている部分もまだまだあるかも知れない。読者諸氏には寛容をもって臨んでいただければ幸いだ。